

緒 言

吉川秀樹

大阪大学大学院医学系研究科整形外科

関節鏡は、1950年代、本邦の渡辺正毅らが世界に先駆けて開発したオリジナリティの高い業績である。その後、1975年より日本関節鏡学会(現 日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会, JOSKAS)を基盤に膝関節鏡の開発、臨床応用を中心に発展してきた。近年の世界的な低侵襲手術への期待に伴い、小関節の関節鏡、脊椎内視鏡など新しい機器が次々と開発されてきた。技術面でも脊椎領域では、日本整形外科学会による脊椎内視鏡下手術・技術認定医制度も確立されている。このように、整形外科領域の内視鏡による診断・治療の進歩は著しく、整形外科手術が激変しつつあるといっても過言ではない。本誌上シンポジウムでは、整形外科各領域での内視鏡を用いた診断・治療の最新の知見を、臨床の第一線でご活躍の先生方に解説していただいた。

伊藤陽一先生には、肩関節鏡による代表的な鏡視下手術である肩峰下除圧術、腱板縫合術、Bankart 修復術、関節包縫縮術などを解説していただいた。安達伸生先生には、膝関節鏡機器の詳細、前十字靱帯再建術と軟骨損傷に対する鏡視下手術の実際を紹介していただいた。杉山肇先生には、股関節鏡の機器、基本手技から、関節唇縫合術、関節遊離体摘出術、femoroacetabular impingement (FAI) に対する手術などを紹介していただいた。山本浩司先生には、橈骨遠位端関節内骨折に対する整復固定術、手関節授動術、舟状骨骨折に対する整復術・骨移植術、手根管開放術、弾発指に対する腱鞘切開術など、多岐にわたる手外科での手術手技を解説していただいた。高尾昌人先生には、足関節鏡の歴史に引き続き、足関節前方インピンジメント症候群や足関節骨軟骨損傷の治療、後足部内視鏡や足底腱膜鏡を用いた手術手技を解説していただいた。山田宏先生には、脊椎外科手術における内視鏡の有用性を、椎間孔部狭窄症を中心に述べていただいた。

いずれも、整形外科医が知っておくべき情報が満載で、明日からの日常診療に有用な知見を提供するものとする。